



TITLE:

李劫人の成都描寫

AUTHOR(S):

中, 裕史

CITATION:

中, 裕史. 李劫人の成都描寫. 中國文學報 1990, 41: 101-128

ISSUE DATE:

1990-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177464>

RIGHT:

李劫人の成都描寫

中 裕 史

京都大學

李劫人が生まれたのは、清朝光緒十七年（一八九二年）のことである。他の四川作家と比べてみると、郭沫若より一年早く、巴金、艾蕪、沙汀より十三年早く、何其芳より二十一年早い。

そして、李劫人がその代表作である長編三部作『死水微瀾』、『暴風雨前』、『大波』⁽¹⁾を發表したのは、一九三六年から一九三七年にかけてである。

この三部作は、辛亥革命を頂點に据えて、それに至るまでの歴史を、庶民や學生、地方官僚とその家族、中央政府高官などのさまざまな角度からとらえて描き出したものである。この三部作が發表される一年ほど前、魯迅は清末の歴史を扱った文學作品の空白を嘆じたが、これらの長編小

李劫人の成都描寫（中）

説はその空白を十分に補うものであった。

當時すでに文壇の中心の一人であった郭沫若は、この三部作について、つぎのように述べている。⁽²⁾

三部作はあわせて四十五萬字ほどであろうが、これがわたしを四、五日のあいだすっかり酔わせた。このように幾日も續けてまる一日小説を讀むなどということは、わたしにあっては二、三十年來なかったことである。

こうして郭沫若の絶讃を得た李劫人であったが、この後、彼に對する研究、評論は空白期に入り、その再開はずっと下って文化大革命の終了をまつこととなる。

文革終了後やあって、李劫人の研究はまず地元四川省で盛んに行なわれた。一九八三年二月には、成都で學術討論會が開催され、二十篇餘の論文が寄せられた。

そして、全國の文藝界も次第に李劫人をとりあげるようになった。最近出版された、張毓茂編『二十世紀中國兩岸文學史』⁽³⁾は、その第二編「第二次國內革命戰爭時期的文學」に「歴史小説」の一節を設け、郭沫若、郭源新（鄭振鐸）、施蟄存とともに、李劫人を論じていう。

李劫人のこの三部作は、四川の風土人情と成都の郷鎮の各階層の市民の心理の生き生きとした描出である。社會風俗も、生活情況も、起居や服飾も、……すべて二十世紀はじめの四川に特有のものであり、たとえば賑やかな東大街の元宵節、興順號の店舗、天回鎮のパザールに出された品物、「痺れて、辛くて、熱くて、柔らかい麻婆豆腐」云々（後略）

ここに指摘されているように、李劫人の三部作の主要な特色は、その濃厚な郷土色である。郷土色を小説に賦與する手法としては、背景描寫、キャラクターの生活の丹念な追求、方言の使用などが考えられるが、李劫人の作品を通讀するとき、まず目につくのは背景描寫の多用であらう。郷土色をその持味とする作家は中國にも少くないが、背景描寫の多用という點において、李劫人は獨特である。

そこで、拙論では、李劫人の郷土色を構成する背景描寫に注目して、それがどのような形式でなされているかを分析し、さらに李劫人をしてその手法を採用せしめたファクターを考察していくこととする。

一

大陸において、現代文學史上これまでに郷土色という點から評價された作家もしくは作家群では、蹇先艾、許欽文、王魯彥⁽⁶⁾、そして「京派」と「海派」⁽⁷⁾、さらに「山藥蛋派」⁽⁸⁾や「荷花淀派」⁽⁹⁾といったところがその主要な人びとである。しかし、質、量ともに郷土文學を代表する作家となると、老舍の名がまず第一に挙げられよう。

老舍は、その小説や戯曲のなかに、北京という舞臺のもつ獨特の雰囲気を巧妙に醸し出した作家である。ただし、老舍の作品の郷土色は、設定された背景の描寫に由來するよりも、創造されたキャラクターに多く由來しているのである。

たとえば、長編小説『四世同堂』を見ても、第一部「惶惑」の第十四節の冒頭に、中秋節を迎えた北平の描寫が千二百字程度でなされているのが目立つくらいで、まとまった篇幅を費やしての背景描寫はほとんどなされていない。老舍は、それに代えて、語り手の視線をキャラクターに

近接させ、キャラクターそのものに郷土色を賦與することによって、その本領を發揮する。

二姐跑到大姐婆家的時候，大姐的公公正和兒子在院裏放花炮。今年，他們負債超過了往年的最高記錄。臘月二十三過小年，他們理應想一想怎麼還債，怎麼節省開支，省得在年根底下叫債主子們把門環敲碎。沒有，他們沒有那麼想。（中略）鞭聲先起，清脆緊張，一會兒便火花急濺，響成一片。兒子放單響的麻雷子，父親放雙響的二踢腳，閒隔停勻，有板有眼：噼啪噼啪，咚；噼啪噼啪，咚——當！這樣放完一陣，父子相視微笑，都覺得放炮的技巧九城第一，理應得到四鄰的熱情誇讚。¹⁰⁰

ここには、旗人、年末、借金、打ち上げ花火とイメージが示唆的に積み重ねられる。そして、多額の負債をかかえながらも、平然と打ち上げ花火に興じ、技巧に酔う旗人のありさまが、「想」、「覺得」という語を使用して、近接した視點から描かれている。讀者は、この「大姐の公公」や「兒子」から北京の匂いを感じすることになるのである。老舍の小説には、こうした主要なキャラクターを活用し

李劫人の成都描寫（中）

た描寫が隨處に散りばめられており、これらの描寫が、老舍の郷土色を形成する大きな役割をはたしているのである。

これに對して、李劫人の背景描寫の第一の特徴は、その量的豊富さである。一千字以上の描寫についてみるなら、『死水微瀾』に六カ所、『暴風雨前』に六カ所、『大波』には三部で合計十八カ所の多さである。單純に字數だけを比較すると、たとえば『死水微瀾』はおよそ十四萬字、『四世同堂』第一部「惶惑」の半分強の字數であるから、李劫人における背景描寫の使用頻度はかなり大きいといえよう。『大波』第三部の第九章第三節は、一九一一年十一月二十七日の大漢四川軍政府の成立式典の情景を描いたものであるが、その冒頭は以下の如くである。

說是正午行禮，但從喫早飯時候，各街各巷的人衆已一群一浪地向皇城涌來。

好多人都以爲這個皇城就是三國時候蜀漢先主劉備即位登基的地方。其實，它和劉備並無絲毫關係。它在唐朝時候，靠西一帶，是有名的摩訶池，靠東一小塊，是節度

使府，大家耳熟能詳的詩人杜甫，曾在這裏陪嚴武泛過舟，還做過一首五言律詩。唐末五代，王建、王衍父子的前蜀國，孟知祥、孟昶父子的後蜀國，即就此地大修宮室苑囿，花蕊夫人做了宮詞一百首來描寫它的繁華盛景。（中略）

今天，——辛亥年十月初七日，這皇城壩一帶，人又擠得象大戲場似的！¹²

冒頭の一文の後、語り手の話題は皇城の歴史に轉じ、一千五百字ほどの長い説明を挟んで、ようやく式典の情景描寫に入っていく。挿入された説明によって、讀者は、成都が清朝から獨立する式典の會場となった皇城に關して、その歴史の概略を知るのである。

こうした客觀描寫は、李劫人の舞臺である成都を讀者に強く意識させるといふ點で、有效な方法ではあるが、反面、プロットを中斷して讀者の注意をそらし、作品の印象を散漫なものとしてしまふ弊害をもちあわせもつことを忘れてはならない。李劫人の背景描寫は、その量的豊富さのゆえに、常に危険性をより多く内包しているのである。

李劫人の背景描寫の第二の特徴は、それが扱う對象の豊

富さである。いま一千字以上に限定して列舉しても、前述した皇城、武侯祠や青羊宮といった名所、成都最大の繁華街である東大街、天回鎮の市の賑わい、街の點景としての茶館や食堂、住居の構造や家具の配置、結婚式や葬式といった儀式など、じつに多様である。

まず名所の描寫に注目すると、李劫人は、『死水微瀾』第五部分第八節で道觀の青羊宮を、『大波』第一部第六章第一節で諸葛亮を祀る武侯祠をとりあげて、その由來や建造物の配置、訪れる人びとの様子などを、よどみなくかつあますところなく描いている。ただし、こうした描寫は、さきに引用した皇城についての説明と同じく、あますところがないだけに、觀光案内の文章を讀んでいるが如き錯覺を讀者に生じさせかねない。

街の描寫についていえば、李劫人は、『死水微瀾』第五部分第一節で東大街の新年を、また第三部分第一節で天回鎮の市を全景として描き、『暴風雨前』第一章第十一節で茶館を、そして『大波』第一部第五章第四節で食堂を點景として描いている。こうした描寫は成都人の生活を最も直

接に反映するものであるが、後述するように自ら食堂を開業したこともある李劫人の本領は、ここに思うさま發揮されているのである。

茶舖，這倒是成都城內的特景。全城不知道有多少，平均下來，一條街總有一家。有大有小，小的多半在舖子上擺二十來張桌子；大的或在門道內，或在廟宇內，或在人家祠堂內，或在甚麼公所內，桌子總在四十張以上。

茶舖，在成都人的生活上具有三種作用：一種是各業交易的市場。貨色並不必拏去，只買主賣主走到茶舖裏，自有當經紀的來同你們做買賣，說行市；（中畧）

一種是集會和評理的場所。（中畧）假使你與人有了口角是非，必要分個曲直，爭個面子，而又不喜歡打官司，或是作爲打官司的初步，那你盡可邀約些人，自然如韓信將兵，多多益善，——你的對方自然也一樣的。——相約到茶舖來。如其有一方勢力大點，一方勢力弱點，這理很好評，也很好解決，大家聲勢洶洶地吵一陣，由所謂中間人兩面敷衍一陣，再把勢弱的一方敷說一陣，就算他的理輸了。輸了，也用不着陪禮道歉，只將兩方幾桌或十幾桌

李劫人の成都描寫（中）

的茶錢一並開消了事。如其兩方勢均力敵，而都不願認輸，則中間人便也不說話，讓你們吵，吵到不能下臺，讓你們打，打的武器，先之以茶碗，繼之板凳，必待見了血，必待驚動了街坊怕打出人命，受拖累，而後街差啦，總爺啦，保正啦，才跑了來，才恨住喫虧的一方，先賠茶舖損失。

這于是堂倌便忙了，架在樓上的破板凳，也趕快偷搬下來了，藏在櫃房桶裏的陳年破爛茶碗，也趕快偷拏出來了，如數照賠，如數照賠。⁽³³⁾（後畧）

ここに引いたのは、成都の名物の一つである茶館の客觀描寫である。この部分では、茶館が成都人の生活においてはたす三つの作用が述べられる。なかんずく、第二の作用においては、客同士が亂闘になったときの茶館側の抜け目ない對應にまで踏み込んでいるが、これは、事情によく通じた者でなければ書けない、李劫人にしてはじめて可能な描寫であるといえよう。

また、引用を省畧した茶館の第三の作用では、「中等以下の人々の客間あるいは休憩の部屋⁽³⁴⁾」として、友人を茶館に誘うことの利點が三つ述べられ、それぞれに説明が施され

ている。

このように、李劫人は、形式的にきちんと整理された文章によって、成都の風俗を要領よくかつ丹念に描き出すのである。

對象の豊富さを論ずるとき、もう一つ言及しておかねばならないのは、李劫人が結婚式や葬式の描寫に大きく紙幅を費やしていることである。

まず、結婚式では、『暴風雨前』第一章第九節に、郝又三と葉文婉の婚禮が四千字ほどの文章で描かれ、また、『大波』第二部第六章第三節に、周安道と龍玄姑娘の婚禮が、來賓の祝辭を中心に六千字にのぼる長い文章で描かれている。

李劫人と同じく四川作家である巴金も、その激流三部曲の第二作『春』のなかで、周蕙が鄭家に嫁いでいく場面を第十九節に置き、字數の上では七千字以上にわたる長いものとなっているが、その大半は、蕙と高覺新の精神的苦痛の描出に費やされており、婚禮の外面描寫は、キャラクターの内面描寫を進行する契機となっているにすぎない。

葬式については、李劫人は、『暴風雨前』第四章第二節に三千字を越える長文を使用して、郝達三夫人の葬儀のありさまを描いている。これをも巴金と比較してみると、激流三部曲の第一作『家』の第三十五節には、高老太爺の葬儀の様子が千五百字ほどで描かれているが、背景描寫にほとんど筆を費やさない巴金としては、この分量は多いものといえるであろう。

しかし、キャラクターの比重ということを考慮に入れるなら、この字數の差は實際よりもっと大きくなる。『暴風雨前』における郝達三夫人の比重は、『家』において封建性を體現する高老太爺のそれとは、比較にならないほど小さい。その郝達三夫人の葬儀に不相應なくらい大きく紙幅を割いたのは、李劫人の意圖が、一キャラクターにすぎない郝達三夫人の葬儀の描寫にあつたからでなく、風俗の側面としての葬儀そのものの描寫にあつたからなのである。このように、李劫人は、さまざまな對象を扱うことによって、多方面から成都を照射して、讀者に成都という舞臺を強く印象づけようとしたのである。

李劭人の背景描寫の第三の特徴は、その視綫の豊富さである。李劭人は、ときにキャラクターを登場させない遠景描寫で、ときに語り手の視野にキャラクターを置いた近景描寫で、そしてあるいはその視綫をキャラクターのそれに重ねるくらい接近させて、さまざまな視點から背景をとらえている。

遠景描寫はややもすれば平板かつ單調に陥りやすい。しかし、李劭人にはこれを免れる工夫がみられる。一例として、『死水微瀾』第三部分第一節に置かれた市の描寫を引いておく。

川西壩——東西二百餘里，南北七百餘里的成都平原的通俗稱呼。——出產的黑毛肥豬，起碼在四川全省，可算是頭一上好豬。豬種好，全身黑毛，毛根稀，矮腳，短嘴，皮薄，架子大，頂壯的可以長到三百斤上下；食料好，除了廚房內剩的米湯菜蔬稱爲泔水外，大部分的食料是酒糟、米糠，小部分的食料則是連許多瘡苦地方的人尙不容易到口的玉麥粉或碎白米稀飯；喂養得乾淨，大凡養豬的，除了鄉場上一般窮苦人家，沒辦法只好放敞豬而外，其餘

李劭人の成都描寫（中）

人家，都特修有豬圈，大都是大石板鋪的地，粗木棒做的柵，豬的糞穢是隨着傾斜石板面流到圈外廁所裏去了，喂豬食的石槽，是窄窄的，只能容許它們僅僅把嘴筒放進去（中疊）它的肉，比任何地方的豬肉都要來得嫩些，香些，脆些，假如你將它白煮到剛好，切成薄片，少蘸一點白醬油，放入口中細嚼，你就察得出它帶有一種胡桃仁的滋味，因此，你才懂得成都的白片肉何以是獨步。

李劭人は、性急に市の描寫に入らず、まず黒ブタの描寫からはじめる。體型的特徴から飼育の方法，さらに料理法からその味わいに至るまで、じつに丹念に説明を加えている。こうしておいてから徐にブタの市の描寫にうつり、續いて米の市、家禽の市、雜穀の市、雜貨の市というふうに客觀描寫が進められていく。

次に視綫を商品から人間に移して、四方八方から市に集まってくる群衆の動きを長江に流れ込む無數の谷川にみたて、最後は音聲をとりあげて聽覺による描寫を配置する。

趕場是貨物的流動，錢的流動，人的流動，同時也是聲音的流動。聲音，完全是人的，雖然家禽、家畜，也會

發聲，但在趕場時，你們却一點聽不見，所能到耳的，全是人聲！有吆喝着叫賣的，有吆喝着講價的；有吆喝着喊路的，有吆喝着談天論事，以及說笑的。至於因了極不緊要的事，而吵罵起來，那自然，彼此都要把聲音互爭着提高，不能再高的高度，而在旁拉勸的，也不能不想把自家的聲音超出於二者之上。於是，只有人聲，只有人聲，到處都是！似乎是一片聲的水銀，無一處不流到。而在正午頂高潮時，你差不多分辨不出孰是叫賣，孰是吵罵，你的耳朵只感到轟轟隆隆的一片。要是你沒有習慣而驟然置身到這聲潮中，包你的耳膜一定會震聾半響。¹⁶⁵

この部分では、家禽や家畜の聲さえ壓倒する人間の聲のすさまじさが語られている。表層構造に着目すると、「○的流動」、「有吆喝着○○的」という形の反復が市の混雑を示唆しており、また、比較的長い語句が連續するなかで、「全是人聲」や「只有人聲」の四字句が非常に效果的に機能していて、引き締まった描寫となっている。

市の描寫全體についていえば、李劫人は、「你」や「你們」という語を使用して、四川人である語り手が外地人で

ある讀者を想定して語るといふ體裁を採っている。もし讀者が四川人である場合は、語り手の側に移入できるわけである。讀者を作品の世界に引きこむこうした工夫も、遠景描寫を平板さ、單調さから救う上で、効果を充分に發揮している。

では、キャラクターを利用した近景描寫はどうであろうか。李劫人は、『大波』第二部第五章第四節に、顧三奶奶を登場させて一九一一年八月のゼネスト時の成都の街の情況を描いている。まず、その冒頭では、顧三奶奶の歩みにあわせて、ひっそりと静まりかえった街を描寫する。

顧三奶奶看見這樣清靜荒涼，倒狐疑起來：「這是咋個的？該不會出啥子事情麼？」想打探一下，同時也要歇歇脚。因就走到飯舖跟前一張傍街安放的大方桌邊，順手拉了條高脚板凳坐下，並向舖子裏一個將近三十年紀的女人打了個招呼：「掌櫃娘，沾個光坐一會兒，要得不？」¹⁶⁶ この引用部分以降は、顧三奶奶と陳麻婆豆腐店の二代目女主人との會話によって、ストライキ決行中の街の情況を讀者に知らせる方式に轉換する。

ここにも、李劫人の工夫のあとが認められる。會話文の使用による間接描寫への轉換という形式的な點は勿論のこと、キャラクターそのものが讀者の興味を引くことや、彼女たち二人の會話が街の情景描寫という目的に必ずしも忠實でなく、しばしば話題があらぬ方向に外れることなども、それである。また、引用部分からも窺えるように、會話中使用されている「咋個的」や「要得不」といった方言も、描寫を生き生きとしたものにする役割をはたしている。

この他に、李劫人には、キャラクターにさらに接近して、語り手の視線をキャラクターのそれにほぼ重ねあわせた描寫もある。『死水微瀾』第五部分第七節には、郝公館における地方官僚一族の生活ぶりが、田舎から出てきてまもない少女春秀という女中の側に立った語り口で描かれている。また、『大波』第一部第四章第一節には、顧天成なるキャラクターのそれとほぼ重なった視線による少城公園の描寫が置かれている。

「喂！變囉！」顧天成不管身邊有人沒人，竟忘形地叫喊起來。

李劫人の成都描寫（中）

再走過去。那不是關帝廟嗎？那不是荷花池塘嗎？那不是流水湯湯的金河嗎？雖然看一道矮矮的土牆圈了進去，形勢還在。何況對面文昌祠門外的那座聳起幾丈高的魁星閣，還依然如舊？原來今天的少城公園，就是庚子年開義和拳、紅燈教、殺大毛子、二毛子的時候，他、顧天成爲了要報仇雪恨，正迷糊裏糊塗奉了耶穌教，每日心驚膽戰，莫計奈何，時常躲進滿城來睡野覺的地方！招指一算：「啊也！十二年了！」難怪從前看不見腳跡的所在，眼前到處是人，從前只有喬木野艸的地方，眼前竟出現了許多高高低低疏疏落落的屋子了！²⁰

この引用部分では、「再走過去」以下の文章において、語り手がキャラクターと一致しているようであるが、續いて「他、顧天成爲了報仇雪恨」とあるから、完全に一致しているわけではない。

しかし、「那不是○○嗎？」や「難怪」といった語句を使用した表層構造は、これまでにみてきた描寫の方式とは異なった印象を讀者に與えるものである。李劫人は、描寫の對象に對する語り手の位置をさまざまに變化させて、成

都という彼の舞臺を描いているのである。

いったい、長文の背景描寫は兩刃の劍である。それは、作品に郷土色を賦與する重要な機能をもつかわりに、プロットの流れを中斷し、また描寫それ自身が退屈なものになりやすいという危険性を常に内包している。

李劫人は、量的豊富さ、對象の豊富さ、視綫の豊富さの三つの豊富さによって、この危険性をできるかぎり低める努力をしつつ、あえて長文による背景描寫を行なった。そしてこれは意圖的なものであろう。李劫人自身は、長編三部作の創作について、つぎのように述べている。²⁰

（前略）この何十年か私が生き、感じ、體驗し、私にとつては重大な意義があり、歴史の轉換期と見なしうる社會現象を何部作かの長篇小説に書き、連續させながら一區切りずつ反映させてみよう。

李劫人は、彼の三部作を、「社會現象」を「反映」するものとして構想したのである。長文の背景描寫を多用した理由については、李劫人は何も述べていないけれども、それがこの構想に即したものであることは明らかであろう。

舞臺となる土地の風俗や歴史をプロットに挿入することによって、讀者にローカリティを強く意識させ、臨場感を与える。これは歴史をテーマに据えた長篇小説にとって有効な手法の一つである。

これまでみてきたように、李劫人は、長文の背景描寫を使用することによって、獨自のスタイルで作品に郷土色を賦與したが、それでは、李劫人にこの手法を採用させた基底には、どのようなファクターがあつたのであろうか。

二

結論からいえば、李劫人の背景描寫を成立させた内的なファクターは、李劫人が生涯成都人でありつづけたということである。

他の著名な四川作家たちは、概して青年期に故郷を離れ、再びそこに居を構えることはなかった。一八九二年に嘉定府樂山縣で生まれた郭沫若は、一九一三年に夔門を出た。

一九〇四年に成都正通順街で生まれた巴金も、一九二三年に上海へ向かった。同じく一九〇四年に新繁縣清流場に生

まれた艾蕪は、一九二五年に昆明を目指した。彼らは、その後四川にごく短期間戻ることであっても、長期にわたって在住することははやなかったのである。

これに對して、李劫人は成都を基本的に離れなかった。つぎに李劫人の足跡を簡単に辿ることにする。

李劫人は一八九一年、華陽縣北門經歷司街に生まれた。六歳のとき外祖母の住む成都狀元街に移り、少年時代をここで送る。この時期に、四川高等學堂分設中學に學んだ期間を挟んで、李劫人は二度成都を離れている。一度は、九歳から十四歳にかけて兩親と江西に滞在したときであり、いま一度は、二十二歳から二十四歳にかけて瀘縣と雅安縣で小吏をつとめたときである。

雅安縣から戻ってくると、李劫人は、『四川群報』の主筆兼編集員や『川報』の社長兼總編集長として、ジャーナリズムの世界で活躍する。この頃、住居を狀元街からすぐ近くの指揮街に移している。

一九一九年八月、二十七歳の李劫人は、分設中學の同級生である周太玄らの誘いをうけて、フランスで「勤工儉

李劫人の成都描寫(中)

學」をなすべく、上海へと出發した。この年の暮れにフランスの土を踏んだ李劫人は、この後一九二四年の九月に上海に上陸するまでのおよそ五年間を、パリとモンペリエですごした。この時期の李劫人は、主としてフランス文學の研究と翻譯に精力を注いだのである。

歸國して成都に戻ってくると、李劫人は、とりあえず狀元街に落ち着いたが、成都大學文預科主任在職中に轉居している。轉居先は指揮街であると思われるが、その翌年、一九三〇年に、指揮街の自宅に「小雅」という食堂を開業したのである。

一九三三年から一九三五年にかけて、李劫人は民生機器修理廠の工場長として重慶に滞在する。これが成都を長期間離れた最後である。

一九三五年、成都に戻ってきた李劫人は、まず斌陞街に住むが、翌年にはすぐ近くの桂花巷に移っている。張秀熟の文章とあわせて考えると、この桂花巷の住居は滿州族がもと使用していた公館であり、『大波』第二部第八章第八節にみられる少城の公館の描寫は、この時期の自らの住居

を下敷きにしたものであろう。

一九三九年には、空襲を避けて、成都の東部郊外にある沙河堡菱角堰に移り、ようやくここを終生のすみかとする。即ち現在の李劫人記念館「菱窠」である。一九六二年にこの世を去るまで、李劫人は、ここに基盤を置いて、嘉樂紙廠の理事長や中華全國文藝界抗敵協會成都分會理事を擔當し、さらに中華人民共和國成立後には、成都市副市長や中國作家協會四川省分會副主席などの肩書きで活躍した。

李劫人は、その七十一年の生涯のなかで、長期間のものとしては四度成都を離れているものの、基本的には成都に在住した作家であるということが出来る。まして同時期の多くの作家が、四川作家に限らず、國民黨の壓迫や抗日戰爭といった政治的な事情から、各地を轉々とすることを餘儀なくされていたことを考えあわせるとき、李劫人が成都人でありつづけたことは大きな意味をもっている。

さて、つぎに小説以外の文章から李劫人の成都に對するアプローチをみることにする。

はなはだ遺憾なことに、われわれは李劫人の著した文章

を現在のごとくは目にすることができない。文化大革命の混亂のさなか失われてしまったからである。そのなかには、歴史を扱った『說成都』や風俗を扱った『漫談中國人之衣食住行』、さらに、李劫人の研究に貴重な資料となる筈の日記や書簡などが含まれている。

このうち、『說成都』は、當時誌上に掲載された冒頭の一章のみが、二千餘年成都大城史的衍變の表題で、『李劫人選集』（以下、『選集』とする）第五卷に收録されている。『選集』の編者附記によれば、全文は『說大城』、『說小城』、『說皇城』、『說河流』、『說街道溝渠』の五章に分かれ、合計十六、七萬字という壯大なものであった。『選集』に收録されている文章はおよそ二萬五千字、引用書も『華陽國志』、『蜀檣杙』、『太平寰宇記』、『資治通鑑』や地方志など數十種に及んでいる。これだけでも、李劫人がいかに本格的に成都の歴史と取り組んでいたかが窺えよう。³⁴

『漫談中國人之衣食住行』は、李劫人の風俗研究を集約した文章であると思われるが、これも、現在目にする事ができるのは『飲食篇』のみである。やはり『選集』第五

卷に收録されているこの文章は、一九四八年に雑誌に掲載されたが中斷した第二稿を、その前年に新聞の副刊に連載された第一稿によって補ったものであり、およそ三萬五千字、三十七篇に分かれている。これら三十七篇には表題が付されていないが、いま、第一稿四十三篇の表題を以下に記して、その内容を概観する。

- 一、食——國粹中的寶典
- 二、高等華人之喫人
- 三、蠻性的復員
- 四、老百姓桌上的菜單
- 五、勞苦大眾的胃病
- 六、胃緊縮症的普遍
- 七、蔬菜之國の謎
- 八、勞苦大眾對食法的創造
- 九、中國人食料之粗劣
- 十、勞苦大眾在食法上的創造性
- 十一、喫雞鴨方式之師承叫化子
- 十二、毛肚火鍋也濫觴於勞苦大眾

- 十三、麻婆豆腐的變味
- 十四、麻婆豆腐考
- 十五、四川不能成爲「蔬菜之國」的理由
- 十六、中國菜味之多變
- 十七、黃豆——中國食品之母
- 十八、中國菜作法之多樣化
- 十九、中國菜之善於配合
- 二十、畧談古代的中國菜單
- 二十一、由中國人的特性去了解中國菜
- 二十二、中國菜味之吸收性
- 二十三、宗教禁忌之限制菜單
- 二十四、食之引發向外擴展之相異
- 二十五、半吊子衛生說之愚笨
- 二十六、葱、蒜、辣椒之可喫可不喫
- 二十七、貧富食單之比較觀
- 二十八、由飽到好喫
- 二十九、菜味之複雜及其表露
- 三十、由火說到菜的藝術

三十一、厨派——食的派系之一

三十二、館派——食的派系之二

三十三、家常派——食的派系之三

三十四、家常菜之可貴

三十五、三派之比較觀

三十六、中國人眼中的「喫」

三十七、食之階級性

三十八、食之傾向鄉野風

三十九、「三世長者，知服食辯」

四十、喫的形式之變化

四十一、不喫即無人生

四十二、喫的態度與情緒

四十三、喫的理想境界

料理の品目、材料、調味料、調理法、食べ方、歴史などさまざまな角度から総合的に「食」の検討がなされている。加えて、前述した自身の手による食堂開業や、自宅に桑原武夫氏を食事に招いたときのエピソードなども、また李勣人の飲食に對するなみなみならぬ關心の深さを示すもので

ある。

『選集』の編者附記によれば、「漫談中國人之衣食住行」は、四部の合計が十五、六萬字にものぼる長大な文章である。いまのところその全貌を知ることとはできないが、その一部である「食」によってみるかぎりでも、この長大な文章が、李勣人の総合的かつ詳細な風俗研究の成果であることが容易に察せられよう。

これまでに述べた二つの文章については、一部分ではあっても、みることができたのであるが、生活の記録として貴重な資料である日記は、その断片すら窺い知ることができない。

李勣人の秘書を二十年にわたってつとめた謝揚青によると、李勣人は日記だけでなく家計簿もつけていた。

彼は青い布を張った中國式の帳簿を備えていて、記したのは家庭の日常の出納であったが、各項の上下左右には、必ず市況、價格、價值、そして營業人の表情などが手あたりしだいにびっしりと注釋に書き込まれていた。

これは、じつに、彼が人情世態を觀察、研究した生き

た記録であり、きわめてよい史料である。

こうした日記や家計簿の存在は、李劫人の背景描寫の成立にとって、重要な意味をもつであろう。その存在自體が李劫人の几帳面な性格を反映しているし、その記載内容が創作と深くかわっていて、李劫人の創作に對する眞摯な姿勢を示しているからである。これまでみてきたように、李劫人は、成都に在住しつづけ、その歴史や風俗や生活を丹念に研究し、記録した。これが、李劫人の成都に對するアプローチなのである。前述した「說成都」や「漫談中國人之衣食住行」が完成したのは、三部作の發表よりも後のことであるが、李劫人のこのアプローチは、一九三〇年代に三部作にとりかかった時點から一貫して行なわれていたと考えるのが自然であろう。

李劫人はこのように成都に對して積極的なアプローチを行なっているが、それでは、成都の側では李劫人をどのように評價しているのであろうか。

六月二十四日、わが國當代の著名な文學家、翻譯家であり社會活動家である李劫人先生の舊居——菱窠で、

李劫人の成都描寫（中）

「李劫人舊居開放式典」の活動が行なわれた。

これは、一九八七年六月二十五日の『四川工人日報』の記事である。⁸⁹ 李劫人が一九三九年から一九六二年にその生涯を終えるまでの二十四年間をすごした「菱窠」が、李劫人記念館として整備され、一般開放されたのである。

李劫人が死去すると、遺族は藏書や資料を國家に寄贈し、成都を離れて北京へ去った。このため、「菱窠」は住む者もなく荒れるにまかされていた。

一九八二年、成都市人民政府は、特別支出金を計上し、李劫人先生の舊居「菱窠」を修復することを決定した。

一九八五年に市政府は舊居を成都市文物保護單位とすることを公布した。⁹⁰

李劫人舊居文物保管所の責任者である艾棣によれば、「菱窠」の修復は、成都市人民政府がその文化政策の一環として行なったものである。しかも、式典で挨拶に立った劉家忠副市長の言によれば、近現代の著名人の舊居としては、これが成都市最初の保護單位である。こうしたことから、成都市の側でも、李劫人の存在を重くみていたことが

わかるであらう。

李掣耘は、その著書『老舍在北京的足跡』⁴²のなかで、つぎのように述べている。

老舍先生はその全精力を北京の描寫に注いだといえる。それはどのような精神が彼を支配していたからであらうか。彼の心のなかに北京への深い愛情が藏せられていたからである。

老舍の場合と同様に、李劫人の成都描寫にも、郷土愛や成都人としての矜持が感じられる。その獨特の長文による背景描寫を可能ならしめた内的なファクターは、成都の側からも重んじられるほど成都とかかわり、成都を知ろうとした李劫人の、成都に對する「深い愛情」であったのだ。

三

しかし、成都人でありつづけたことのみが李劫人の成都描寫を成立させたのではない。これとは別に、外側から作用してその成都描寫を成立させたファクターが存在する。

陳翔鶴は、「懷念與追悼」と題する文章のなかで、つぎ

のように述べている。⁴³

しかし、わたくし個人についていえば、わたくしが、李劫人の名前をはじめて知るようになったのは、「北伐」以前では、やはりフローベール『ボヴァリー夫人』、ドーデ『プチ・シヨーズ』、モーパッサン『男ごころ』のような翻譯と彼自身の手になるフランス文學史⁴⁴によってであった。

李劫人が文壇にその名を知られるようになったのは、まずフランス文學の紹介者としてであった。李劫人は、一九一二年に處女短編『游园會』⁴⁵を發表して、はやくから創作活動を開始していたが、その活動範圍は成都に限定されていた。一九二二年、上海の中華書局からモーパッサン『男ごころ』⁴⁶が出版されたとき、その翻譯者として、李劫人の名がはじめて中央文壇に出たのである。

當時フランス留學中の李劫人は、フランス文學の翻譯に没頭していた。⁴⁷一九二〇年代前半に發表されたものをみると、創作方面では中編小説『同情』⁴⁸一編があるばかりで、あとは翻譯が十四編を數える。⁴⁹四年十か月に及ぶフランス

留學は、その多くの時間が翻譯活動に消費されたのである。

さて、翻譯家としての李劫人は、一九二二年のモーパッサン『男ごころ』から、一九四四年のゾラ『夢』まで、前後十五人の作家を紹介したが、このうち、その複数の作品を翻譯した作家は、モーパッサン、ルイス、プレヴォ、フローベール、ドーデ、マルグリットの六人である。

李劫人が留學した當時のフランスでは、自然主義の文學がすっかり衰退し、新しい文學の可能性を模索する試みが多方面からなされていたが、李劫人の翻譯の對象もまた自然主義の本流を前後に外れていることが、これら六人の顔ぶれからもわかるであろう。

自然主義の衰退とそれ以降の新しい文學について、李劫人は、一九二三年に『法蘭西自然主義以後の小説及其作家』という論文を發表している。その論文のなかで、李劫人は、まず自然主義の凋落を論じてつぎのように述べる。⁽⁵¹⁾

なぜなら、彼（ゾラ派を指す、引用者）は實際の經驗を重んじるばかりで、心の力を疎かにしたからである。人生を描寫するのは、もとよりその膽力や觀察によつて

李劫人の成都描寫（中）

得たものにとづけば、忌憚なく幾重もの黒いヴェールを力のかぎり暴くことができる。ところが、彼は闇黒の正面に力を入れるばかりであつて、ひたすらなまなましく描寫して、虚飾の社會に對しては多くの影響を生じないわけにはいかなかった。しかし、それでは、光明の所在はいずこなのか。どのようにすれば光明への道を歩めるのか。この點になると、ゾラ派はもはや關與しない。さながら、醫師が診察をして下した診斷は正しいけれども、處方は示さないようなものである。

第二は純客觀的描寫であり、それが實質的對象を細大漏らさず敘述していて、ちょうどナレーシヨンのない映畫を編集したようであるが、心的對象には筆が費やされない。

李劫人はこのように作品の方向と描寫の對象の二點をとりあげている。これらの見解は當時の中國で一般に行なわれていたものであり、矛盾の表現を借りるなら、前者は「自然主義自體に對する不滿を思想の上から立論したもの」、後者は「自然主義自體に對する不滿を藝術の上から立論し

たもの」である。

この論文において、李劫人は、以下に自然主義以降の作家を六章にわたって分類、論述している。いま、その章題をあげておく。

一、自然主義的破壊者與結束者

二、以藝術爲宗的

三、從心理學方面糾正自然主義之失的

四、詩情的小説

五、利己感情派與利他感情派

六、風土畫的

これだけでも、自然主義以降の文學が非常に多角的に概観されていることがわかるであろう。また、紹介されている作家も、ユイスマンスやミルボー、バレスなど十八人を數えて、たいへん詳細な論述となっている。

さきに李劫人の翻譯の對象が自然主義の本流から外れていると述べたが、その際に名前をあげた六人の作家のうち、マルグリット、プレヴォ、ルイスの三人はゾラ以降の作家であつて、このことも、この論文に表れている李劫人のフ

ランス文學における志向を裏付けているであろう。

このほかに、李劫人の翻譯には、もう一つ顯著な傾向がみられる。それは、女性キャラクターの比重が大きい作品を多く對象としていることである。フローベール『ボヴァリー夫人』、エドモン・ド・ゴンクール『娼婦エリザ』、モーパッサン『脂肪のかたまり』、プレヴォ『女達の手紙』と、作品を羅列しただけで、この傾向はただちにみてとれよう。

さて、このように、李劫人の翻譯と論文とによつて當時のフランス文學の状況を概観するとき、李劫人の創作した三部作のいくつかの特徴が、當時のフランス文學に存在していたものであることに気がつくであろう。即ち、歴史を題材とすること、歴史を描くのに單一の階層からせず複數の階層から立體的にすること、同一のキャラクターもしくはその關係人物を連作である別の作品に登場させること、若い女性キャラクターに重要な位置を與えて主として戀愛に關するプロットを構成させること、丹念な背景描寫を行なうこと、などである。

これらの特徴がフランス文學の手法をそのまま移入した

ものであると速断することはできないにしても、その影響を受けていることは明らかにみてとれよう。郭沫若や曹聚仁が李劫人の三部作をゾラの『ルーゴン・マカール家の人びと』になぞらえたのも、首肯できることである。中國では、『死水微瀾』の蔡大嫂（即ち『大波』の顧三奶奶）と『ボヴァリー夫人』のエンマとの比較がしばしば行なわれるが、李劫人におけるフランス文學の影響は、キャラクター創造の一面のみに限定されるものでなく、もっと全般的に認められるものである。

ここで背景描寫にたち戻れば、さきの李劫人自身の指摘にもあったが、十九世紀フランス小説では背景描寫が一つの手法として成立している。たとえば、フローベールは、『ボヴァリー夫人』の第二部第一節の冒頭に、ヨンヴィル・ラベールなる村の綿密な描寫を配している。また、ゾラは、背景描寫を小説の不可缺の構成要素とみなしている。

ゾラの描寫は長々と續き、文字通りの目録、旅行案内、平面圖、パノラマで、それがかなり無器用に、ただの人物を所かまわず必要に應じて特別な觀察者に仕立て、突

李劫人の成都描寫（中）

然金縛りにして行なわれる。そしてこの人物が小説家によって蒐集され、必ずしもこなれていない歴大な資料を利用する。しかし、同時にこの觀察者を通じて（フローベールにも見られた一つの構造に従い）しばしばかなり漠然とした抒情性を持つ數々の印象が表現されるのである。

さきに分析した李劫人の成都描寫は、フローベールやゾラなどフランス作家の手法に觸發されたものと考えられる。ただし、「ゾラ派」を批判的にみる李劫人は、背景描寫を自身の作品に配置するにあたって、獨自の工夫をこらしているのである。

これまで考察してきたように、李劫人の成都描寫には十九世紀フランス文學が大きく關與している。十九世紀フランス文學は、成都人である李劫人に外界から作用して、その成都描寫を成立せしめたファクターであるということができよう。

それでは、李劫人と同様に成都生まれでありフランス留學經驗者である巴金の場合、その長篇小説に背景描寫がほ

とんど置かれていないのは、どうしてであろうか。

巴金の代表作である『家』、『春』、『秋』のいわゆる激流三部曲は、成都を舞臺としているにもかかわらず、成都の描寫がほとんどみられない。これは、作者の注意が主としてキャラクターに向けられ、背景描寫が顧みられなかったことも勿論であろうが、そうした意圖的なことばかりでなく、背景描寫を可能ならしめるファクターが巴金には存在しなかったことも考慮しなければならない。

前述したように、巴金は十九歳のとき成都を離れ、その後再び成都に住むことはなかった。また、あるいは創作旅行で、あるいは抗日戦争によってやむをえず、各地を轉々としながら創作や編集などの活動に従事した巴金は、非常に多忙であったから、資料を蒐集してじっくりそれに目を通す時間をもつことができなかった。故に、李劫人にみられる内的ファクターは熟成しなかったのである。

さらに、巴金のフランス留學は二年足らずで、李劫人に比べて期間が短く、この間、文學ではゾラを好んで讀んでいるけれども、巴金の注意は、周知の如く、どちらかとい

えば文學よりも思想に向けられていた。故に、長篇小説の構想の面では、十九世紀フランス文學、とりわけゾラの影響がみられるものの、背景描寫を成立させるに足る外的ファクターとはなりえなかったのである。

このように巴金と比較してみると、李劫人が成都人でありつづけたこと、そして十九世紀フランス文學の影響を大きく受けたことの意味がいっそう明らかになるであろう。李劫人の創作における主要な特徴の一つである背景描寫の多用は、これら内的と外的の二つのファクターの存在によって、はじめて可能となったのである。

注

- (1) 『死水微瀾』は、一九三六年に中華書局から、一九五五年に作家出版社から出版され、『暴風雨前』は、一九三六年に中華書局から、一九五六年に作家出版社から出版された。また、『大波』は、一九三七年に上中下三冊が中華書局から出版され、一九六二年から一九六三年にかけて第一部から第四部までの四冊が作家出版社から出版された。拙論では、一九八〇年から一九八四年にかけて四川人民出版社から出版された『李劫人選集』第一卷から第四卷、及び一九八六年に四川

文藝出版社から出版された『李劫人選集』第五巻を、テクストとして用いた。

(2) 魯迅『田軍作『八月的鄉村』序』

「さきの清末について述べるなら、大事件が多くなかったということはできない。アヘン戦争、中佛戦争、日清戦争、戊戌の政變、義和團の亂、八か國聯合軍北京入城及び辛亥革命しかし、われわれはしっかりした歴史著作をもたなかった。ましてや、文學作品はいうまでもない。」(試譯)

(3) 郭沫若『中國左拉之待望』(『李劫人選集』第一巻所收)

(4) 伍加倫、王錦厚『李劫人研究簡述』(『文學研究動態』、中國社會科學院文學研究所、一九八四年第六期所收)によれば、一九四九年から一九七八年までの三十年間に發表された李劫人に關する文章は、僅かに四編を數えるのみである。

(5) 張毓茂主編『二十世紀中國兩岸文學史』、遼寧大學出版社、一九八八年。

(6) 魯迅『中國新文學大系・小説二集』導言』では、蹇、許、王の三人を郷土文學の作家として紹介している。

(7) 一九二〇年代末から一九三〇年代前半にかけて、北平を中心とする、天津、濟南、青島などの北方都市で活動した作家群を「京派」、上海を中心とする、杭州、蘇州、南京などの南方都市で活動した作家群を「海派」と稱する。

一九三三年十月十八日、沈從文が天津の『大公報・文藝副刊』第八期に「文學者的態度」と題する文章を發表したのが

李劫人の成都描寫(中)

契機となり、「京派」と「海派」の論争がおこった。

尚、この「京派」、「海派」の呼稱は、作家の本籍地とは無關係である。

(8) 抗日戦争期、山西省に在住し、山西の農村を創作の題材とした作家群を「山樂蛋派」と稱する。その代表的な作家は趙樹理である。

(9) 抗日戦争期、北平、天津、保定の三角地帯に形成された文學流派を「荷花淀派」と稱する。その代表的な作家は孫犁である。

(10) 老舍『正紅旗下』(『老舍文集』第七巻所收、人民文學出版社、一九八四年)第一章。

「二姐が大姐の嫁ぎ先に驅けつけたとき、大姐の舅は息子と中庭で火花をしているところであった。今年、彼らの負債はこれまでの最高記録を超えた。十二月二十三日は小正月で、あたりまえなら、彼らは、どうして借金を返済し、どうして支出をおさえて、大晦日に債權者が門環を敲きこわさぬようにしようかと考えなければならぬのであるが、全然、彼らはそんなことを考えなかった。(中略)爆發音がまず聞こえる。鋭くひきしまった音である。まもなく火花がサツと降り注いで、音響が一體となる。息子は單發の麻雷子を上げ、父親は雙發の二踢脚を上げる。間隔がきちんとはかられ、メリハリがついている。パチパチ、ボン、パチパチ、ボン……ドンノひとしきり上げおえると、父子は見かわしてほほえみ、

打ち上げの技巧は北京第一で、周囲の絶讃を得てしかるべきであると思うのであった。」(試譯)

(11) 『大波』第四部は、李劫人の死によって中断され、未完稿となった。故に、拙論では扱わないこととする。

(12) 「正午の開式ということであったが、朝食の時分から、大通りや横町の人びとはもう皇城に次から次におしよせた。

多くの人が、この皇城を三國蜀漢の先主劉備が皇帝位に即位した所であると思っている。しかし、ここは劉備とは全然關係がないのである。ここは、唐代には、西側が有名な摩訶池、東側が節度使府であり、おなじみの杜甫は、曾てここで嚴武の供をして舟を泛べ、五言律詩を作った。唐末五代においては、王建、王衍父子の前蜀國、孟知祥、孟昶父子の後蜀國は、何れもここに宮殿と庭園を造り、花蕊夫人が宮詞一百首を作つてその繁榮ぶりを描寫した。(中畧)

今日——辛亥年十月七日は、この皇城廣場一帶には人がひしめきあい、さながら大劇場のようである。」(試譯)

(13) 「茶舗、これは成都のまちなかの名物である。まち全體でどのくらいあるか知らないが、平均すると、一本の通りにまづ一軒はある。大きい店も小さい店もあつて、小さい店はほとんどが二十ばかりのテーブルを置いてある。大きい店は門道のなかや、廟宇のなか、祠堂のなかや、會館のなかに設けられていて、テーブルも四十以上はある。

茶舗は、成都人の生活において三種の作用をはたす。その

一つは各種の交易の市場である。商品は必ずしももっていかなくともよく、買い手と賣り手が茶舗にいきさえすれば、仲買人がやつてきて、取り引きをし、相場をいう。(中畧)

もう一つは集會と仲裁の場所である。(中畧) かりに、あなたが人と言ひ争ひをして、理非曲直をハッキリさせ、メンツを立てねばならないけれども、裁判沙汰が嫌いである場合や、訴えをおこす手はじめとして、できるだけ人を呼んで、もちろん、韓信兵を將いるで、多ければ多いほどよいのであるが、——あなたの相手方も自ずからそうなる——茶舗にきてもらうようにする。もし、一方の勢力が大きく、もう一方の勢力が弱ければ、この決着はつけやすく、解決も容易である。みんなが聲を荒らげてひとしきり怒鳴り、いわゆる仲裁人が雙方をひとしきりなだめ、それから勢力の弱い方にひとしきりいいきかせて、そちら側の負けということになる。負けになつても、頭を下げて謝るには及ばず、雙方あわせて數卓か十數卓の茶代を支拂えば、それで済むのである。もし、雙方の勢力が拮抗しており、どちらも負けを認めたがらなければ、仲裁人は何もいわないで、怒鳴りあうにまかせ、その舉句どうにも收拾がつかなくなると、殴りあうにまさせる。武器は、まずは茶碗であり、ついで腰掛けであつて、血が流れ、死人が出るのでは、巻き添えをくうのでは、と近所を不安がらせるころになると、それから町役やら、守備隊の隊長やら、保長やらが駆けつけてきて、ようやく、不本意ながら

ワリをくった側が、まず茶舗に損害を弁償する。こうなると、ボーイたちは俄然忙しくなる。階上に置いてあったこわれた腰掛けをさっそくこっそり下ろしてきたり、帳場の桶にしまつてあった古い缺け茶碗もこっそりもち出してきて、それらの分もきっちり弁償させるのである。(後略) (試譯)

- (14) 竹内實譯 (『現代中國文學』7 李劫人、河出書房、一九七一年) による。

(15) 「川西壩——東西二百餘里、南北七百餘里の成都平原の一般の呼び名——」に出る黒豚は、少なくとも全四川省においては第一級の上肉だった。豚の種類がよく、全身黒毛で、毛は密生せず、脚も嘴も短く、皮はうすく、骨格は大きく、よく生長すれば三百斤前後にもなる。餌が上等で、厨房であまつた米のとき汁やお菜、いわゆる湘水とよばれるもののほか、大部分が酒糟、米糠、小部分が人間でも瘦せた地方では容易に口にはいらぬ玉蜀黍の粉、あるいは屑米の粥。たいせつに飼育されていた。養豚は、貧乏な農家がやむなく放し飼いでいるのは、豚小屋を設けるのが普通だ。地面に大きな石の板をしき、丸太で柵をかこい、豚の排泄物は傾斜のついた石の板の上を流れて、豚小屋の外にある厠にたまるようになっていた。飼料を入れる石槽は口が小さく、豚がわずかに嘴の先をつっこむことしかできない。(中略) その肉はいかなる地方の豚肉よりもやわらかく、匂いがよく、齒切れがいい。試みに、ころあいにさつとゆがいて薄く刻み、ちよつと白醬

李劫人の成都描寫(中)

油につけて口へほうりこみ、味わいながら嚙んでみるがいい。胡桃の實のような味があることがわかるとおもふ。こうして、成都の白片肉がいかに他に類例のないものであるかが納得いただけるわけだ。」(竹内實譯 同(14))

- (16) 「市とは商品の流通であり、錢の流通であり、人の流通であり、同時に音の流通でもある。その音は完全に人の發するものであって、家禽や家畜も鳴き聲をたてるが、あなたが市に出ていってもそれは耳にはいらない。耳にするのは、すべてこれ人の聲である。物賣りの客を呼ぶ聲、價格を交渉する聲、道をどけると叫ぶ聲、議論、談笑の聲。ささいなことからの怒鳴り合い。それはもちろん、これ以上は高くだせないくらの聲をはりあげるし、仲裁する男も、喧嘩するふたりよりも聲をはりあげないわけにはいかない。こうして、人の聲あるのみ、人の聲あるのみ、どこもかしこも人の聲だ。ノ聲の水銀が流れて至らざるところなし、とでもいおうか。晝時の最高潮のころになると、あなたはどれが物賣りの聲で、どれが喧嘩だか聞きわけられないだろう。耳はただ、わあっという音を感じるだけである。この聲の潮に身を置く習慣がなくやってきたとしたら、確言するが、あなたの鼓膜は必ずやしばらくツンボになることだろう。(竹内實譯 同(14))

- (17) 『死水微瀾』では、蔡大嫂として、ヒロインの役割が與えられていた。

- (18) 「顧三奶奶は、このように靜かで人氣のないのを見ると、

かえって怪しみだした。『これはどうしたことだろう。何かおこったのじゃないかしら。』様子を探ってみたかったし、また足も休めたかった。そこで、食堂の前の道端に置かれた方形の大きなテーブルまで歩いていき、そのまま脚の高い腰掛けを引っぱりだして腰をおろし、店の三十歳くらいの女性に聲をかけた。『おかみさん、ちょっと座らせてもらってまわらないかしら。』(試譯)

(19) 「咋個的」は「怎麼搞的」、「啥子」は「甚麼」、「要得不」は「行不行」の意味である。

(20) 『あれっ、變わったぞ。』顧天成は、近くに人がいるかどうかにはかまわず、われを忘れて呼びだした。

もう少し歩いていく。あれは關帝廟じゃないか。あれは荷花池じゃないか。あれは流れとうとうたる金河じゃないか。背の低い土屏に圍まれてはいるが、名残りはまだある。まして、向う側の文昌祠門外の數丈もの高さに聳えたつ魁星閣は、依然としてもとのままである。なんと、今日の少城公園は、庚子の年に義和拳、紅燈教が騒ぎをおこして、外國人やその手先を殺したとき、彼、顧天成は、仇を討ち恨みをほらすために、わけもわからずキリスト教に入信したばかりで、毎日ビクビクして、どうすることもできず、ときおり滿城にこっそりやってきて晝寝をした場所なのであった。指を折って數えてみる。『ああ、十二年だ。』どうりで、曾ては人氣がなかった場所が、いまは至るところ人ばかりであり、曾ては高木

や野艸しかなかった場所が、いまは高いのも低いのもまばらなものもあるたぐさんの家並みが現れたのである。』(試譯)

(21) 李劫人『死水微瀾』「前記」、竹内實譯(同(4))による。

ただし、この文章は一九五五年に書かれたものであり、『死水微瀾』中華書局本の時點ではなかった。

(22) 李劫人『自傳』(『李劫人選集』第一卷所收)及び伍加倫、王錦厚『李劫人傳畧』(『新文學史料』一九八三年第一期所收)に據る。これらの不足を他の資料によって補う場合は、その典據を一々掲げる。

(23) 華陽縣は現在の成都市街の東南部にあたる。

(24) 四川高等學堂は、現在の四川大學の前身である。四川大學校史編寫組『四川大學史稿』(四川大學出版社 一九八五年)によれば、分設中學は、高等學堂の入學生の一定以上の質を確保するため、その供給源として高等學堂側自らが一九〇八年に創設した。

(25) 周太玄(一八九五—一九六八)は、生物學者として、また詩人として著名である。

(26) 短編小説『湖中舊畫』及び『編輯室的風波』には、「一九二五年四月脱稿於成都狀元街」と附記されている。

(27) 成都大學は、現在の四川大學の前身である。

(28) 『吳虞日記』下冊(四川人民出版社、一九八六年)の「中華民國十七年(陰曆、引用者)正月十二日」の項に「成大同人、約十四日午後二時、借磨子街一百一十五號李劫人寓團拜

云々」とあり、また、「中華民國十八年（陰曆、同）四月二十八日」の項に「賀李劫人新居：此生當着幾兩屐；借宅能居三百年」とある。

29 車輻「留學生、教授、美食家——李劫人先生與食道」（『四川烹飪』一九八六年第三期）には、「及至開張前，一不登廣告，二不做宣傳，在不動聲色中開了張，但因爲是留法的大學教授李劫人開的，各大小報仍然發了消息，首先是文化界人士，社會名流，（中略）都來品味。」とあり、當時相當な評判をよんだことが窺える。一方で、『吳虞日記』下冊の「中華民國十九年（陰曆、引用者）六月二十五日」に、「喫菜數件，均貴而平常。惟青果酒尚佳。」と率直に記されているのが興味深い。

30 短編小説「程太太的奇遇」には、「一九三六年九月二十日寫於成都桂花巷」と附記されている。

31 張秀熱「『李劫人選集』序」に、「此後我們再見，已是一九三六年西安事變前夕。在一所破舊大公館進門左側的一個小院云々」とみえる。

32 李劫人「自傳」によれば、「麥窠」とは「菱角堰之窠巢」の意である。

33 『風土什志』第三卷第二期、一九四九年、未見。

34 「説成都」の他にも、同種のものに「成都的一條街」、ルポルタージュに「危城追憶」（何れも『李劫人選集』第五卷所收）がある。

李劫人の成都描寫（中）

35 第一稿は『四川時報』副刊『華陽國志』に連載され、第二稿は『風土什志』第二卷第三期から第六期にかけて發表された。何れも未見。

36 車輻の前掲文による。

37 桑原武夫「四川紀行」（『桑原武夫集』第四卷所收、岩波書店、一九八〇年）には、李劫人が夕食に出したスーブの内容を桑原氏に問うたところ、沈思默考ののち見事に正解を得た、というエピソードがみえる。

38 謝揚青「『李劫人選集』編後」

39 この他に、『四川工人日報』週末刊『星期六』同年六月二十日、『成都政協報』第七期同年六月二十三日、『四川日報』同年六月二十五日、『成都晚報』同前などに、同様の報道がなされている。また、中央では『文藝報』一九八七年第二十九期にこの報道がなされている。

40 艾棣「李劫人雕像揭幕及故居開放典禮紀實」（未發表）

41 艾棣整理「李劫人故居開放及雕像揭幕典禮上的講話錄音稿」（未發表）による。

42 李犁耘「老舍在北京的足跡」、北京燕山出版社、一九八六年

43 陳翔鶴「懷念與追悼」（『文藝報』一九六三年第一期所收）

44 單行本として刊行されたものはない筈であるから、これは後出の論文を指すものと考えられる。

45 『中國新文學大系』第十集（『史料・索引』卷、上海良友圖書印刷公司、一九三六年）のなかの「作家小傳」の「李劫

人」の項には、「法國文學翻譯家。」と記されている。

(46) 『晨鍾報』紙上に發表されたが、いまだ發見されていない。

(47) この前後の狀況は、李劫人「回憶在法國動工儉學時的片段生活」(『李劫人選集』第五卷所收)に詳しい。

(48) 李劫人『同情』、中華書局、一九二四年

(49) 李劫人が翻譯した作家をその生年順に並べ、翻譯作品と初出年、掲載誌などを記しておく。尙、漢字表記は李劫人によるものである。

① 弗洛貝爾 一八二一～一八八〇

Gustave Flaubert

『馬丹波娃利』 一九二五

單行本、中華書局

『薩朗波』 一九三一

單行本、商務印書館

② 龔古爾 一八二二～一八九六

Edmond de Goncourt

『女郎愛里沙』 一九二六

『東方雜誌』第二十三卷八～十二期

③ 歹里野 一八三三～一九〇七

André Theuriot

『諾厄爾節之前一日』 一九二三

『東方雜誌』第二十卷七號

④ 左拉 一八四〇～一九〇二

Emile Zola

『夢』(共譯) 一九四四

『抗戰文藝』第九卷一～六期

⑤ 都德 一八四〇～一八九七

Alphonse Daudet

『小物件』 一九二三

單行本、中華書局

『達哈士孔的狒狒』 一九二四

單行本、中華書局

⑥ 莫泊桑 一八五〇～一八九三

Guy de Maupassant

『人心』 一九二二

單行本、中華書局

『脂球』 一九三二

『西蜀評論』第一卷四～七期

⑦ 拉魏黨 一八五〇～一九二九

Henri Lavdin

『煩惱』 一九二三

『少年中國』第四卷四期

⑧ 馬爾格利特 一八六〇～一九一八

Paul Marguerite

『蟲』 一九二五

『小說月報』第十六卷一號

- 『離婚之後』 一九二五
- 『小說月報』第十六卷五號
- ⑨ 卜勒浮斯特
Marcel Prévost 一八六二～一九四一
- 『和解』 一九二三
- 『東方雜誌』第二十卷八號
- 『婦人書簡』 一九二四
- 單行本、中華書局
- 『斯摩倫的日記』 一九二四
- 『小說月報』第十五卷法國文學研究專號
- ⑩ 馬爾格利特
Victor Marguerite 一八六六～一九四二
- 『單身姑娘』 一九四四
- 單行本、中西書局
- ⑪ 羅曼羅蘭
Romain Rolland 一八六六～一九四四
- 『彼得與露西』 一九二六
- 『小說月報』第十七卷六～七號
- ⑫ 魯意士
Pierre Louÿs 一八七〇～一九二五
- 『斜陽人語』 一九二二
- 『小說月報』第十三卷十二號
- 『馬丹埃士果里野的非常奇遇』 一九二四
- 李劫人の成都描寫（中）

- 『小說月報』第十五卷法國文學研究專號
- ⑬ 馬郎
René Maran 一八八七～一九六〇
- 『霸都亞納』 一九二八
- 單行本、北新書局
- ⑭ 阿爾夫
Pierre Wolf 一九二五
- 『堵色愛斯迭兒』
- 『文學週報』第二百零期
- ⑮ 發赫兒
Claude Farrer 一九三四
- 『文明人』
- 單行本、中華書局
- ⑯ 李劫人「法蘭西自然主義以後的小說及其作家」（『少年中國』第三卷第十期）
- ⑰ 原文は以下の如し。
- 因為他只重實際的經驗，忽視心靈的力量，描寫人生，固能憑其巨膽，憑其觀察所得，毫無顧忌，將重重黑幕，盡力的揭破。然而他只是着力在黑暗的正面，只管火辣辣的描寫出來，對於被粉飾的社會誠不免要發生許多的影響；但畢竟何處是光明的所在？怎樣才是走向光明的道路？論到這層，左拉學派就不管了，猶之醫生診病，所說的病象誠是，却不列方案。其次便是純客觀的描寫，只是把實質的對象一絲不走的寫下來，彷彿編

演了一段不加說明的活動電影，而心靈的對象却不涉及。

- ⁶² 沈雁冰「自然主義與中國現代小說」(『小說月報』第十三卷第七號)

- ⁶³ 『死水微瀾』のフランス語譯：RIDES SUR LES EAUX DORMANTES (GALLIMARD, 1981) の譯者である Wan Chun yee は、その前言のなかで、李劫人が翻譯したフランス小説の半ば以上は女性の生活を描いた作品であると指摘している。(興膳宏教授教示)

- ⁶⁴ 郭沫若前掲文、曹聚仁『書林新話』、三聯書店、一九八七年

- ⁶⁵ たとえば王錦厚「蔡大嫂與包法利夫人」(『四川師範學院學報』一九八三年第二期)がそれである。

- ⁶⁶ ローズ・フォルトシエ著、大矢タカヤス譯『十九世紀フランス小説』、白水社、一九八五年、一二五頁、一二六頁。